

出会い

トレッキングでパキスタンの山奥に行ったときのことだ。村の子どもたちが集まってきたので、ウォークマンの携帯スピーカーから流れる忌野清志郎にあわせて歌ったことがある。まだパラボラアンテナが出回る前だったからだろう、歌はへたくそだったのに、子どもたちはこちらがびっくりするほど喜んでた。

「よっぽど刺激のない、平坦な毎日を送っているのだろうな」とそのとき私は考えたが、本当のところはどうだったのだろう。

人生の半分を山登りに費やしてきた。トータルで二十年以上になる。十年ほど前から「登山とはなにか」に悩むようになった。登山をはじめたころは、山を通して人生を充実させたい、いろいろのものを

はなく、内的な深みに左右されるのではないかと感じはじめた。外の世界に刺激を求める年頃が終わろうとしていたのかもしれない。そんなときに出会ったのが、源じいさんだった。

これから書こうとしているものは小説である。実のところ本当の話だが、小説ということにしてほしい。やましいことはない。私のなかでは筋が通っている。だが私のなかで筋が通っていても、法律に触れる部分があるかもしれない。源じいさんが亡くなってからずいぶん経つ。私のやったことは死体遺棄になるのだろうか。死体遺棄だったとして時効はどれくらいで成立するのだろうか。どちらにせよ、今まで誰にも話したことがないこの話を、なぜ私はそろそろ話してもいいと思うようになった。

その話は、私が釣り竿を持って溪流を歩くようになった頃にはじまる。源じいさんの溪は、首都圏からそれほど遠くない、三つの県の県境が交わる山塊にあった。

大学を卒業してひとりで沢登りをしていたとき、間違えて杣道こまみち(山仕事の道)を下りてしまったのが、

見ているいろいろな経験をしたい、くらいしか考えていなかった。いろいろな体験を経た人間は魅力的で格好いいはずだと思っていたからである。死ぬかもしれない経験はタフっぽい。海外の山は名前だけでスゴイ気がする。だから単純にヒマラヤにも憧れた。

だが、人間が物質的(肉体的)な存在である限り、体験の量には限界がある。いろいろな体験を経た人間が、必ずしもその経験が示すほど、深い人間になっていないということも、残念ながらいくつも見てきた。体験とは何か。経験とは何か。体験を通して自分はなにを求めているのか。

例えば海外旅行などの体験は、自分の内面を掘りさげることにつながる場合が多い。だが、刺激は、くりかえせば鈍化する。体験の質とは外的な刺激で

源じいさんの溪との出会いだった。出会いとはいっても、その時は間違えて下りだしたことにすぐ気がつき、稜線へ登り返したので、溪には下りなかった。その杣道は細いわりに、しっかりと踏まれていて、道のつきかたや傾斜、森の雰囲気、長い時間の気配と温もりがあった。機械を使って整備した登山道よりよほど好感がわき、どこにつながるのか興味があったため、その日の沢登りのことは忘れてしまった。でも、その道のことは記憶に残ることになった。

道がどこにつづくのか、実際に歩いてみるまでに流れた数年の歳月は、私がちやきちやきのクライマーから溪流釣りも好む登山者へ変化するのに必要だった時間である。

登山は山に習え、といったのはラインホルト・メスナーだ。釣りは魚に教えてもらえ、とまだ誰も言っていないなら、私がここで言うっておく。魚がすくない溪で長い時間竿を振っても釣りの腕は上がらない。実際に魚がかかったり、逃げられたりした経験の積み重ねが釣りの上達には重要なのだ。

釣れなくても大自然のなかで竿を振っていれば満足だという言いぐさがある。ヘタクソの負け惜しみ